

## 第 7 節 法華經の流伝と注釈

### 1 インドから西域、中国、そして日本へ

法華經はただ、難しい仏教の教理を理路整然と述べたものではなく、むしろ文学作品のようにストーリーを展開しているお経です。現在まで、漢訳の妙法蓮華經がいちばん多く読誦されてきたのですが、法華經二十八品には6万9384文字の漢字が並べてあり、これは日本人にとっては簡単になれ親しむというわけにはまいりませんでした。ですから読誦といっても、その意味を理解しながら読むのではなく、日本人が漢文の真読（棒読みのこと、黒豆読みともいう）によって読むのはどちらかと言えば、呪文としての効能を期待したからです。しかし、サンスクリットの法華經はインド人にとっては容易に理解ができたでしょうし、漢訳された法華經は中国人にはそのまま、大体のあら筋が理解できたことでしょう。

そして、法華經にはさまざまな実践修行の方法が説かれ、しかも現世の利益や功德が大きいことが随所に述べられていますから、一般民衆に浸透して行きました。法華經のサンスクリット原典は西北インドのカシミールのギルギットにのみ発見されていますが、もとはインド全域に流布されていたであろうと思われます。すでにふれたように、法華經は龍樹菩薩が大智度論に30カ所以上も引用されており、また、堅意（350～400頃）の「入大乘論」二巻（北涼道泰等訳）も法華經について論じています。またインドにおける現存する唯一の法華經注釈書である天親（世親）[4～5世紀]の「法華經論」は漢訳「妙法蓮華經憂波提舍」として二訳が残っています。

唐の僧祥の「法華伝記」巻第一には真諦三蔵の言としてインドにおいては法華經の注釈をする者が五十余家あったといい仏滅後五百年のおわりに龍樹菩薩が法華論を作り、六百年のおわりに堅意菩薩が釈論を、また九百年中に天親が法華論を製作したという記述があります。（大正蔵 51巻52頁）

五十余家あった注釈書、僧侶の書いた論書でも散逸してしまい、法華經がどのよう

に解釈され、大乘の僧達にどのように修行されていたのかもハッキリしませんが、民衆の信仰のあり方はなお一層、今や分からないのです。なるほど、法華経の中には塔の崇拜とか、受持、読、誦、解説、書写の行（五種法師）ということが強調されていますが、インドに法華経だけを信奉するグループが仮にあったとしても具体的に、どのような地域にどのような形態で信仰を行っていたのかは現在ではあまりよく分かりません。

しかし、法華経という經典の広がりとは法華経の研究と民衆の信仰は対応するものであり、ネパールや西域に、そして中国へ朝鮮、日本へと經典が伝わるたびにその信奉者は増えていったのです。

仏教の伝播についてはインド、中国、日本と三国伝来といますが実は、そのあいだにいくつもの国を経ている場合もあります。絹の道—シルクロードは早くから東西の交易路として開けました。タクマラカン砂漠の南北の縁に沿って天山南道、天山北道の二道がパミール高原（葱嶺）を経て中央アジア、インドに通じる幹線となっていて、ここを経由して中国の絹織物が西洋に運ばれたのです。その仲介点として重要な役割をはたしたのが西域です。元来、西域というのは漢の西方を示す名前で、今の新疆が中心で、西域36国というように沢山の国が栄えました。漢の武帝は匈奴を挟撃するために大月氏と結ぶために張騫（？～前114）を遣わし、二回目にはイリ地方の烏孫との同盟を試み失敗して匈奴に捕らえられました。しかし、十年間の捕囚の後、に帰還して西域の事情が知られるようになりました（前126）。武帝は大軍をもって大宛を攻め落とし、匈奴を駆逐して西域都護府を置きました。（前60）更に、その後、後漢の光武帝は一時撤退していた西域の再確保に力をいれましたが、西域交通は大いに開けて交易ばかりではなく、東西の文物が往来して仏教もガンダーラ美術もこの道に乗って西から東へと東漸してきたのです。

しかし、タクマラカン砂漠は2000<sup>キ</sup>に及び、その北には天山山脈が覆いかぶさり、南には崑崙山脈がそそり立ち往来する者は砂漠と山脈の間の麓に沿ってへばり付

くように歩かなくてはなりません。4世紀末に中国を旅立ちインドに向かった東晋の求法僧の法顕が書き残した「仏国記」には

「空には鳥も飛ばず、地上には獣の走る影も見えない。見渡す限り砂漠が広がり、どこから渡ればよいか分からない。先行して死んでいった人の骸骨を目当てに進むより他はない」という記述があり、いかに厳しい旅であったかはかりしれません。盗賊も横行し、体力を消耗しながら飢えと渴きに責められながら延々と求法の旅を続けた法顕や義浄、更に西域やインドから中国へ伝道の旅をした多くの訳経僧達の死をも恐れない使命感には心うたれます。今日の外国旅行は娯楽でしかありませんが、そのころの旅は死と隣り合わせの行です。私達は意識はしていませんが、法華経も自然に伝わったのではなく、そういう屍の上を伝わってきたのです。西域にある三十六国は、そのような厳しい砂漠の道程の中にとときどき現れるオアシスを中心に栄えた都市です。

その中でも、西域南道の中心に位置するホータン（コータン、于闐）は前2世紀頃から交易市場として栄え、さまざまな人種が集まり、いろいろなものが集積され、同様に仏教等の文化の交流地点となりました。7世紀の中ごろ、やはり中国からインドに旅した玄奘三蔵は「大東西域記」の中で、瞿薩旦那（クスタナ、于闐のこと）には仏法が栄えており、伽藍は100余カ所、僧侶は5000余人もいて、大乘の法を皆修行していると書き残していますから、相当な隆盛を誇っていたことでしょう。そのホータンの東方すぐの所が法華経梵本の発見されたカダリクとファルハード・ベークです。さらに東晋の釈道安の「西域史」にはホータンの王宮には法華経の梵本6500偈が所蔵されていると記録されていたといわれています。

同様に天山北道の龜茲（クツチャ）には小乗仏教が主として栄えましたが、ここから神異僧として聞こえ、中国北方の異民族の国、後趙（319-352）の石勒や石虎がその靈験に帰依をして布教を応援して中国で活躍をしたのが仏図澄（232-348）です。彼は117才で没するまで、30余年、北支那で活動して九百の寺院と一万の門下を育成したと伝えられます。その仏図澄や王族出身で妙法蓮華経を訳出し

た鳩摩羅什がこの亀茲から輩出をしたのです。

やはり、玄奘の西域記によれば亀茲の様子は「文字はインド文字に則り少し、改変がある。管弦伎楽によって亀茲という名があり、伽藍100余箇所、僧徒5000余人、小乗教の説一切有部を学し、西門の外路、左右に90余尺の立像の大仏があり、この像の前で5年に一度、大会を催す。毎年、秋分の時は数十日間、国を挙げて僧徒が集まり王臣も俗務から離れて浄業を修する。諸寺の仏像を珍宝でかざり輦輿に乗せて集まる」という記述がありますから、やはりずいぶん栄えていたのでしょう。この国も漢や唐、突厥（ソグト）に隷属し、唐末にはついにイスラム教徒によって滅ばされてしまい、それからは仏教が全く衰えました。

仏図澄の門下には釈道安（314—385）や竺僧朗、竺法雅、竺法汰などの弟子が集まり、中でも釈道安は前秦の苻堅に勧めて鳩摩羅什を亀茲から迎えさせたのです。ですから道安がいなかったなら妙法蓮華經の翻訳はできておらず、それだけでも大変な功績です。亀茲出身の仏図澄の弟子が亀茲出身の羅什を招いたのですから、因縁があるのでしょうか。同時に道安は僧が苗字を名乗っていたのを改めて、仏弟子は皆、釈尊の弟子であるから釈と名乗ればよいとしたり、それまでの仏教が老莊思想の「無」を仏教の「空」にあてはめて、仏教を老莊思想的に解釈をして受容してきたのを「格義仏教」と非難して、仏教独自の立場からの理解をするべきであると主張をいたしました。今日では、やはりその道安にしてもやはり老莊思想の残滓が看取されるといわれませんが、なかなか鋭く中国における仏教受容の根本問題を見通していたといえるわけだけで、大いに評価しなくてはならないのです。今でも、比較思想という研究分野がありますが、果たして全く異なる歴史や思想の流れの中で成立した思想と表面的に概念が類似しているからと比較してみても「似ている、同じタイプの思想だ」といったどんな意味があるのか私には理解できません。また、仏教を解釈するのにただ、方便として西欧の哲学思想との対比をして、哲学の概念を用いて仏教を説明するのはさておいて、それを正しい学問的方法であると思って仏教語を哲学の概念に置き換えることが

本来、許されることであり、それによって仏教の言葉で構成する意味の世界をそのまま伝え得るとするなら、これは二重の誤りを犯しています。つまり、明治時代になって、西欧の哲学が日本に紹介されるにあたって訳語として採用されたのは多くは仏教語でしたから、仏教の影響を引きずってしまったのです。「宗教」という言葉も「自由」も仏教語です。そうして時代が経ち、ようやく仏教語としての本来の意味を失ってきた哲学の用語を再び、今度は仏教の中に当てはめるのはおかしな気がします。

さて、符堅は羅什の到着を見ずに死にましたが、これは配下にあった姚萇將軍の反乱によるものできっかけは思いがけないことからでした。符堅王が羅什を連れに遣いにやったのは呂光將軍といますが、彼が龜茲を討って羅什を捕らえて、姑蔵（涼州）まで戻ったとき、前秦の符堅王に仕えていた姚萇將軍が戦いに破れて、その罪を恐れて384年に独立をしてしまい、のみならず符堅王を殺し、後秦をうち建てたことを伝え聞きました。これを聞いて驚いた呂光將軍は長安に戻るのを取りやめて涼州にとどまり、後涼国を建ててその国王となりました。

その後、両者がなくなり後秦は後に名君と称えられた姚興（366 416）がつぎ、後涼国は内紛が続きましたが、やがて後を継いだのは呂光の甥の呂隆でした。呂隆と姚興は和睦を結び、姚興の要請に基づき401年12月20日に鳩摩羅什は後涼から後秦に引き渡されることとなりました。姚興は軍隊を派遣して羅什を迎え、丁重に長安に招き自国の仏教文化の興隆をはかったのです。これによって羅什は計、18年の捕囚生活の後に長安で訳経に携わることになったのです。

鳩摩羅什の父は鳩摩羅炎といいインド人で、代々、大臣の家柄だったと記されています。鳩摩羅炎は出家して、旅に出て龜茲に至り、その出自を聞いた王は敬慕して国師に任じました。時の龜茲国王は帛純（? ~ 384）といい、二人は義兄弟となりました。その国王の妹を耆婆伽（Jīvaka）といい、彼女には赤いほくろがあり、龜茲には昔から、そういう人は智慧のある子を生むという言い伝えがありました。耆婆伽は鳩

摩羅炎を見るや、望んでその妻となり、鳩摩羅什を生んだのです。7才の時に、母の耆婆伽が尼僧となると同時に羅什も出家し、日に1千の偈（経文の中の詩文）と3万2千の経を暗唱し、師匠がその意味を教えるとたちまち理解をしてしまうといいわば大天才の少年僧へと成長してまいります。9才の時には、母が王の妹であるためぜひたくになりやすいので、これを避けてカシュミール（罽賓）に行き槃豆達多法師に小乗の教えを学び、宮中で外道の論客と法論をして勝つくらいでした。さらに12才で故郷に帰り、それからまた遊学して、莎車（ヤルカンド）の須梨耶蘇摩に大乘を学びました。そして、いつの日か東方の国に仏法を弘通するのを自分の使命といたしました。そうしているうちに、前述のように呂光將軍に捕らえられたのです。

羅什は長安の南、西明閣逍遙園に止住して訳経に従事したのです。

全部で、74部384巻の経律論の三蔵を訳し、中でも妙法蓮華経一部八巻を訳するときには、心血を注ぎ、国王までみずから訳場に臨んで、旧本の「正法華経」を手にとって比べたと記録されています。

国王の姚興は、「大師は聡明なことは天下に類がない、もし亡くなることがあれば、その法の種が尽きてしまうから」と十人の伎女をつけて子供が生まれるようにしたといいます。それ以来、僧坊に住むことなく在家の生活を送りました。

そこで、羅什は訳した法華経は世に流布するようになったが、「もし、その訳に誤りがなければ、臨終して荼毘に付した後に、たとえ不浄の身は焼けることはあっても、わが舌ばかりは焼けないであろう」と言い、弘始11年8月20日に亡くなりました。

ところが「御舌計り火中に青蓮華生ひて其上にあり、五色の光を放ち夜は昼の如く、昼は日輪の御光をうばい給ひき。さてこそ一切の訳人の経々は軽くなりて、羅什三蔵の訳し給へる御経、殊に法華経は漢土にやすやすとひろまり給ひしか」（撰時抄）と日蓮聖人が述べておられるようなことがあったと言われています。

訳場には2000人ももの僧や学者が集って推敲を重ねて、その意味を正確に、しかも読誦に適する美しいリズムと響きをもった経文に仕上げていったのです。そこで、

羅什以前の訳は、そこで古訳といい羅什以後の訳を旧訳と呼び区別するようになりました。

弘始8年(406)5月、訳出された「妙法蓮華経」のほか、「阿弥陀経」、「小品般若経」、「維摩経」などの経典、律では「十誦律」、論書は「中論」、「百論」、「十二門論」、「大智度論」、「十住毘婆沙論」、「成実論」の翻訳をいたしました。

門下三千といい、道融、僧叡、僧肇、道生の什門の四聖といい慧嚴、慧観等の六人を加えて十哲といえます。

妙法蓮華経の訳出が完了すると羅什門下の僧融、曇影、道憑なども競って法華経の義疏(注釈書)の製作をいたしました。現存するのは建康の道場寺に住した慧観(424-453)の「法華宗要序」と竺道生(355-434)の「妙法蓮華経疏」二巻だけです。

そのほか、劉虬居士は斉の時代に10人の学僧とともに「注法華経」十巻を作ったといいますが現存しません。

また、有名なものは光宅寺・法雲(467-529)の法華義記八巻、三論宗の嘉祥大師・吉蔵(549-629)の法華玄論十巻、法華義疏十二巻、法華遊意一巻、法相宗の慈恩大師・窺基(632-682)は「法華玄賛」十巻などです。

しかし、圧倒的な影響力を後代まで及ぼし、かつ最も優れた注釈は天台大師・智顛(538-597)の三大部(天台三大部、法華三大部)で、天台大師は法華経の題号である妙法蓮華経の五字を解釈して、その玄妙の義を説いた「法華玄義」十巻、法華経二十八品の文々句々を四種釈(因縁釈、約教釈、本迹釈、観心釈)という四つの解釈の方法をもって説いた「法華文句」十巻、そして玄義と文句に顕された法華経の実践修行である止観を明かした「摩訶止観」十巻を著しました。

この三大部の筆受(聞き書き)をしたのは章安大師灌頂(561-632)ですが、それ以後の天台宗は華嚴宗や真言宗に押されて振るいませんでした。この劣勢を挽回

したのが妙楽大師湛然（711 - 782）で天台宗の復興と法華経が最も優れている（法華最勝、法華独勝）ことを明らかにするために三大部にさらに注釈を施して、「法華玄義釈籤」十巻、「法華文句記」十巻、「止観輔行伝弘決」十巻を著して、他宗の破折と法華経の絶対性（超八醍醐）を明らかにしたのです。

日本での最初の法華経の注釈をして、その紹介と仏法弘通を志したのは聖徳太子です。太子は、光宅寺法雲の法華義記に基づいて「法華義疏」を作成、仏教を政治の理念として、拠り所と定めて、さらに法華経を仏教の根本とされました。「和をもって尊しと為す」という有名な十七条の憲法は仏教精神以外の何物でもありません。

その後、法華経は国分寺を中心に講讃されましたが、本格的に法華経を中心とする天台大師の教えが到来するには伝教大師大師最澄が出現を待たなければなりませんでした。

平安の初期、桓武天皇の庇護を受けつつ、伝教大師は還学生として入唐して妙楽大師の弟子である、道邃、行満より法を相伝して帰朝、比叡山延暦寺に日本天台法華宗を開いて、門下を養成しさらに、大乘戒壇の建立の運動を続けて、ついにその死後、宿願が達成されました。密教と禅と戒律の相承を承けて帰朝したため、誤解されやすいのですが、伝教大師が本懐を述べた時期の著書である法華秀句や依憑集には法華経の優位性がハッキリと表されているのです。（以上 第1章）